



多様な学習者が安心して学ぶために日本語教師が知っておくべきこと
—セクシュアル・マイノリティを理解する—
開催報告



日時:2021年9月12日(日)14:00~17:00 Zoomによるオンライン開催

参加者:45名(講師・スタッフを含む)

今年度の「あしたば」勉強会は、2021年9月12日(日)に、講師として、一橋大学にて「ジェンダーとセクシュアリティの心理学」の科目担当、また、臨床心理士として学生支援業務を担当されている、柘植道子先生をお招きして開催しました。

まず、第1部の冒頭で、Zoomの画面に表示される氏名について、柘植先生のお名前の横になぜ「she/her」と記載があるのかについてご説明がありました。これはご自身の性自認(she)と、どのように呼ばれたいか(her)を示しているということでした。

第1部は講演として、セクシュアリティやセクシュアル・マイノリティ、トランスジェンダー、LGBTQIA+、SOGIEなどのセクシュアル・マイノリティに関わる基本的な用語や、ホモフォビア、マイクロアグレッション、マジョリティの特権などの概念について説明していただきました。興味深かったのは、日本でよく使われているSOGIEのモデルの限界です。出生届・戸籍で決められた「性別」は女性か男性かという二元的な捉え方のため、「性自認」「性的指向」「性表現」においても、女性か男性かの二つの軸でしか捉えられない点がこのモデルの限界だそうです。これに代わり国際的に主流になりつつあるのは、The Gender Unicornとして紹介されているモデルで*1、セクシュアル・マイノリティが自分自身を把握する上でも重要だということでした。*1 <https://transstudent.org/gender/>

休憩後の第2部は、ワークセッションとして、グループに分かれ事例検討を行い、Padletを用いて話し合いの結果を共有しました。最後に、講演中や事前アンケートに寄せられた質問に対して解説していただきました。質問の中には、セクシュアル・マイノリティ学習者への具体的な対応を求められる事例もあり、ご自身の経験と照らし合わせ、内省しながら参加して下さった方も

多かったようです。センシティブな内容を誤解のないように配慮しながら話して下さり、的確なアドバイスをいただくことができました。



ケース (想像で膨らませてください)

インドネシアからの留学生A。家族はインドネシア。一人暮らし。戸籍上の性は男性。性自認は男性。教員から見ると明るく、友人関係も学習にも問題のない学生。
クラスメイトは、Aのことを「ゲイ」ではないかと噂しているが、本人は自身の性的指向について公にしている。
ある時、クラスメイトの一人(B)が教員(=あなた)に、「Aはゲイだ」と伝えた。



勉強会終了後の事後アンケートでは、36名(回収率92.3%)から回答が寄せられました。全体的に満足度が高く、自由記述には「今回の企画は、真のダイバーシティを目指すうえで必要なテーマだったと思う」「このような企画が学会で取り上げられたことは素晴らしい」「人権にかかわる非常に重要なテーマの企画だった」などの記述が見られ、このテーマを本学会で取り上げた意義について肯定的な意見が見られました。一方で、話し合いの時間設定や情報共有ツールなどにご意見をいただきましたので、今後の課題としたいと思います。

セクシュアル・マイノリティのみならず、「すべての人の人権」を改めて考えさせられるお話でした。柘植先生の熱意溢れるお話と

参加者のみなさまのご協力に心より感謝申し上げます。

(文責:中島)

チャレンジ支援委員会:古賀万紀子・杉本香・中井好男・中島祥子・松葉葉子